

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月 25日現在

機関番号：12102

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2011

課題番号：22760450

研究課題名（和文）国際交流を背景とした中東都市計画史研究と都市保全プロジェクトへの還元

研究課題名（英文） A study on urban planning history in the Middle East based on the international cooperation and its reflection to urban conservation projects

研究代表者

松原 康介（MATSUBARA KOSUKE）

筑波大学・システム情報系・助教

研究者番号：00548084

研究成果の概要（和文）：

本研究の成果は、①番匠谷堯二氏を初めとする国際的に活動した都市計画家の業績解明を通じた中東都市計画史の研究、および、②歴史から学びえた都市計画論上の教訓の、現在のわが国による都市保全プロジェクト（JICA）への還元、の二点から報告される。審査付き論文として、①について国内誌1/海外誌1、②について国内誌1/海外誌1、の成果を上げた。また、学術的知見を JICA プロジェクト「ダマスカス首都圏都市計画・管理能力向上プロジェクト」に反映し、歴史的街道のファサード改善への提言を実施した。

研究成果の概要（英文）：

Through this research project, the following results were confirmed; 1. Urban Planning History in the Middle East and North Africa from the viewpoint of autobiography of urban planners such as Gyoji Bانشoya who worked for foreign countries. 2. Reflection of the historical research on the international cooperation project called “The Project for Urban Planning and Development in Damascus Metropolitan Area (DMA-UPD)” where I suggested some ideas for the façade improvement project.

交付決定額年度：

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011年度	1,700,000	510,000	2,210,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：都市計画・建築計画

科研費の分科・細目：建築学、都市計画・建築計画

キーワード：中東・北アフリカ、都市計画史、国際交流

1. 研究開始当初の背景

中東・北アフリカ地域には、数千年と言われる歴史を誇る都市が多く存在する。歴史都市は、代々受け継がれてきた生活の知恵の結晶であり、優れた歴史建築の集積であり、ま

た多様な文化の長きに渡る平和共存の証でもある。しかし、現代においては老朽化や過密化、あるいは経済発展に伴う行過ぎた近代開発といった、現実的な都市問題に直面しており、いかにして保全・継承されるべきかが、国際的に重要な課題となっている。筆者は博

士研究において、モロッコの古都フェスを事例に、保全と近代化のバランスを巡って揺れ動いた都市計画の歴史を考察してきた。

21世紀を迎え、中東・北アフリカ都市の保全と継承は、更なる国際化と主体の多様化（国レベルから草の根型支援まで）の下に、新たな局面を迎えようとしている。本研究の特徴は、こうした近代都市計画の変遷と旧市街の保全・継承を、都市に多様性をもたらす国際交流の一環としてとらえる点にある。とりわけ、後述のように、同地域で活躍した日本人建築家・番匠谷堯二（ばんしょうや・ぎょうじ：1930-99）を皮切りとする、現代に至るまでのわが国による国際協力の歴史を、背景として重視する。これまで全く知られていなかった人の動きや、これに伴う計画論の多様化と空間の重層化といった視点を加味することで、官製型の都市計画史を超えた、壮大な都市作りの物語を構築していきたい。

2. 研究の目的

本研究は、対象を中東・北アフリカ地域に拡大した、応用研究である。旧市街の空間構成を既往研究から踏まえた上で、20世紀以降の近代都市計画史の批判的な分析を行い、未来に向けた都市の保全・継承の指針を得ることを目的とする。また、筆者が現在進行中の都市保全プロジェクトに関わっている経緯から、その指針をプロジェクトに反映させ、事例として選ばれた実際の都市空間において実現する。更に、そこで得られた知見を研究にフィードバックすることを試みる。

ここで注目されるのは、一人のわが国出身の建築家が中東地域で残した業績である。番匠谷堯二は清家清の門弟から出発して、フランスに学んだ後、自らの計画論を編み出しながら、同地域の都市計画を主導した人物である。筆者は近年、この番匠谷の業績を一つの切り口とすることで、同地域の都市計画研究に新規性をもたらすことを提唱してきた。つまり、一般的にまだまだ遠い国のように思われる同地域の都市計画史を、番匠谷を初めとするわが国との交流を背景として、わが国と密接に関連づけて解明するのである。歴代都市計画の功罪を経験として蓄積することで、現在の都市保全事業に反映できるとともに、都市を巡る継続的な協力・交流の歴史を積極的に評価し、わが国から中東・北アフリカへ向けたメッセージともできるであろう。そこでは、先進国から途上国への一方的な近代都市計画技術の伝達ではなく、都市の文化や歴史を相互に尊重し学びあうことで、双方の都市の多様化の素地が形成されることが期待できるであろう。

分析の対象は、番匠谷が都市計画を担当したアルジェ、バイルート、ダマスカス、アレppoの4都市である。いずれもフランスの植

民地都市計画が実施され、旧市街が世界遺産に登録（バイルートを除く）され、そしてわが国を含む様々な主体による保全プロジェクトが実施されている。イスラームの空間原理が強く作用する旧市街の存在、バロック的な欧風空間原理の受容、そして国際協力に基づく保全再生といった点で、共通項が多く比較にも適している。4都市それぞれについて、既往研究から旧市街の空間構成を把握した上で、「植民地時代」、「独立期」、「世界遺産登録以後」の三期区分に基づく歴史的・計画論的分析を行う。それぞれの時代に活動した都市計画家と計画図やテキストから、時代毎の都市計画の特徴（主体・理念・方法など）を整理し、フィールドワークによってその実現実績を検証する。功罪を含めた都市計画の歴史から、多様性をもたらす国際交流の萌芽的事例を抽出する。

3. 研究の方法

本研究は、大きく、(1) 文献解析に基づく歴史研究（一部は既に完了）と、(2) 実測・ヒアリング等のフィールドワークの2つの方法を段階的に組み合わせて実施する。平成22年度においては、(1)の完遂と(2)の一部実施、平成23年度においては(2)の完遂を目標とする。

また本研究の成果は、JICAがダマスカスにおいて実施している都市計画プロジェクトに反映する。これは、筆者自身がJICAの専門家業務として主導する。また、連携を効果的に進めるために、22年度にダマスカスにおいて、23年度にバイルートにおいて、国際交流会議を開催する。これは研究成果を基に、都市の保全再生のあり方を広く現地で議論し、連携の効果を高めるためである。

更に、JICA以外の国際協力機関との連携、バイルート中東研究日本センター、アレppo大学学术交流日本センターの活用により、国際交流としての都市保全を総合的に実施する。

4. 研究成果

4-1 学術業績としての成果

まず、本研究によって得られた業績としての具体的成果を、研究計画のタイトルに即して、(1)番匠谷堯二氏を初めとする都市計画家の業績説明を通じた中東都市計画史の研究、および、(2)歴史から学びえた都市計画論上の教訓の、現在のわが国による都市保全プロジェクト（JICA）への還元、の二点から報告したい。

(1)については、すでに番匠谷氏の業績全体を鳥瞰する学術論文を執筆していたが、より詳細に掘り下げる必要から、まず青年期の国内業績を対象を絞り、5-②論文を執筆し

た。番匠谷は清家清の指導の下で、「歴史的空間の再構築」をコンセプトとする建築実作「正方形の家」を実現した。これは今日でいうところのパーティション・フリー住宅であり、狭いながらも住人の家族構成の変化に応じて空間をフレキシブルに変化させるというものであった。これは、清家清が舗設や室礼（しつらい）といった寝殿造りの建築語彙で説明してきた「すまい」という概念に通じるものである。番匠谷は、清家の影響の下に、日本の古典的な空間に範を求めながら、当時喫緊の課題であったローコスト住宅のデザインとして、パーティション・フリーの空間を提案したのだといえる。これを本研究では、「歴史的空間の再構築」と定義し、後の中東・北アフリカ地域における番匠谷の業績を計画的に分析する上での手がかりとしたい。

また、上述の鳥瞰的な論文（邦文）についても、英文とし、大幅な加筆を加えて、国際都市計画史学会（International Planning History Society）の審査付き大会論文として採用された（5-①）。中東における都市計画史は依然としてマイナー分野であるが、国際的な場で、日本との国際交流に基づく中東の都市計画史の更新の可能性について意見交換を行う。

(2)については、現在筆者が参加しているJICAプロジェクト「ダマスカス首都圏都市計画・管理能力向上プロジェクト」を事例に、まず5-④論文を執筆した。これは、開発調査→技術協力プロジェクトと発展してきたJICAプロジェクトの経緯を踏まえ、2009年の開始時より、シリア人カウンターパートどのような議論をし、どのようなフィールドワークを実施してきたのかを報告したものである。更に、⑤-3論文では、それまでの調査の結果、歴史的街道のファサード改善プロジェクトを実施することが提案されたのを受け、実際に筆者が主導した調査報告を取りまとめて執筆したものである。既存のファサード調査が、ともすればファサードの歴史的特徴を喪失させてしまう危険を孕んでいるのに対し、本JICAプロジェクトでは、「原状復旧型」のファサード改善が方針とされていることを報告し、復旧すべき原状について、歴史的、空間的視点から考察したものである。

4-2 国際交流活動としての成果

上記の研究を通じて得られた学術的知見を、更に国際協力に基づく都市保全の実務に還元し、筆者なりの社会貢献を試みるのが本研究プロジェクトの重要なアウトプットであった。筆者が「文化・歴史建造物保護専門家」として調査団員を務めさせていただいているJICAプロジェクト「ダマスカス首都圏都市計画・管理能力向上プロジェクト」（橋本強司調査団長）に成果を反映し、歴史的街

道のファサード改善への提言を実施した。成果はプロジェクト報告書としても刊行される予定である。

プロジェクトへの参加は、2009年から2012年にかけて、ダマスカス出張8回、国内関連出張（会議・カウンターパート研修等）8回に及び、シリア人カウンターパートとの協議に基づく都市保全の構想、調査、計画立案まで携わった。

また、シリアにおいては、アレppo大学学術交流日本センターとの学術交流に基づく調査活動を二度、実施した。一度目は筑波大学日高健一郎教授のプロジェクトとの共同研究として、二度目は同藤川昌樹教授との共同研究として実施された。後にシリアは内戦に突入し、結果的に、現地調査を実施できた最後の機会となった。

レバノンにおいては、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の運営による中東研究日本センターとの学術交流に基づき、5度に渡る現地調査を実施した（旅費及び調査費用の一部を本プロジェクトから出費）。

4-3 更なる展開に向けて

本研究は上記のとおり、一定の基礎的成果をあげたと考えられるが、継続することで更なる展開を期したいと考えている。2012年度からは、後継研究プロジェクトとして「多様性と共生の知恵を育む中東・北アフリカ地域の都市計画史」（若手研究A）を採択頂くことができた。本若手B研究の成果を踏まえて、本格的な中東・北アフリカ地域の都市計画史の解明を実現したいと考えている。

4-4 参考資料「主要論文梗概」

<5-①論文梗概>

Gyoji Banshoya was a Japanese planner whose life's work was urban planning in the Middle East and North Africa. The purpose of this paper is to provide a full picture of his work, which still remains unknown.

Examining the works of Gyoji Banshoya in Japan, the first part of this paper considers his ideas about history in his youth. Analysis of "The Square House (1953)" shows that the influence of Kiyoshi Seike brought about a concept of reconstitution of historic spatial composition to realize width and convertibility in low-cost houses. This concept was introduced as a symbol of the transformation of Japanese housing and accepted in international architectural trends at the time. His translations of post-war Italian town planning documents found similar concepts and motivations

which confirmed his planning methods.

The second part of this paper clarifies his work in Algiers. After studying at seminars by Kiyoshi Seike, Banshoya studied under the supervision of G. Hanning and G. Candillis at ATBAT. His experiences at ATBAT in Paris led him to Algiers where housing policy permitting Muslims and Christians to cohabit had been introduced. Banshoya engaged in the study of an innovative housing system. Jean-Jacques Deluz testified that he was a genius of dessin. As micro scale and macro scale were clearly unified in French-Algerian architecture and urban design, Banshoya started to work not only on housing design but also on urban design in Algiers. In fact, he participated in the Les Annassers, Mahieddine, Champ de Manoeuvres, Chateaneuf and Frais-Vallon projects. Though none of these projects can be solely credited to Banshoya, the fact that Mayor Chevallier listed Japanese at the top of his list of member nationalities at the Agency suggests that Banshoya performed some important tasks.

The third part of this paper considers Banshoya's work in the Middle East. As a UNDP expert, he started to work in Beirut, Damascus and Aleppo with M. Ecochard in 1962. In fact, they were responsible for the elaboration of master plans for these three cities and that of Damascus still remains as a legally active master plan today. Referring to CIAM policies, they tried to preserve the old cities by way of activation and introducing modern roads. In Aleppo, Banshoya's policy was to limit modern construction in the old city. However, development pressure was so strong that some roads from the R. Danger period in the 1930s were finally adopted despite his conservative plan. Coupled with Syrian political struggle in the 1980s, there were some movements against their modernist policies and Banshoya's plans were suspended. Banshoya retired in Beirut. However, his works are still regarded as great even today and should be reevaluated through a detailed examination of his planning policies.

In the conclusion, I suggest that the urban planning history of the Middle East and North Africa should be updated and rewritten based on the works of G. Banshoya.

<5-②論文梗概>

番匠谷堯二のわが国における業績の分析を通じて、番匠谷の初期における歴史への考え方の実際を明らかにする。「正方形の家」(1953年)の分析からは、師である清家清の影響が確かに見られる。すなわち、歴史的空間の再構成によって、当時の住宅建築の課題であったローコスト住宅に、広さと可変性をもたらすという考え方である。

この考え方は、日本の住宅の変遷の象徴として海外に紹介され、当時の建築的潮流の中で受け入れられた。編訳論文「戦後イタリアの住宅地区計画」の分析からも、同様の考え方が見出されるとともに、住宅作家として出発しながら後に都市計画家へと転じていく、都市計画への萌芽的な関心が認められた。

<5-③論文梗概>

シリアの歴史都市ダマスカスでは、番匠谷堯二の時代より、日本による国際協力が継続されてきた。現在進行中のプロジェクト、「ダマスカス首都圏都市計画・管理能力向上プロジェクト」では、歴史的市街地の保全が一つの課題とされ、カスル・ル=ハッジヤージュ通りのファサード改善が試みられている。

本稿では、ファサードの現状調査を実施し、歴史的な正統性やイスラーム的空間構成に準じた、原状復旧型のファサード整備のありかたを考察する。プロジェクトで作成したファサード・プランの分析からは、同通りは歴史的に住宅地区であり、原状復旧型ファサード整備にふさわしい、歴史的要素が存在することが示された。結論として、これらを特に継承、再生することの重要性が提起された。

<5-④論文梗概>

Though many historic cities exist in the Middle East and the North Africa, little has been written on the issues about urban conservation in this area, except for some pioneer works. In this discussion paper, I introduce an example of the actual conservation project which has been carried out by JICA in Damascus, capital of Syria. For the target area of the Qanawat south, I and Syrian counterparts examined two methods which will be generally available for historic research on heritage buildings and quarters: analysis of documents and field surveys. The results reported to show how they should be used in combination for practical assessment of historical value of heritage buildings and quarters.

The first way of the field survey is at the quarter level. Based on the years of construction shown in the plaques of some

monuments in a quarter, it is possible to infer the age and the characteristics of the quarter. The second way is at the house level. Collection of traditional architectural vocabulary and measurement of residential spaces of traditional houses should be carried out. The results of the survey may provide useful guidelines for inhabitants and craftsmen to appreciate the value of traditional houses.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

① Kosuke Matsubara "The Work of Gyoji Banshoya in the Middle East and North Africa", Proceedings of the 15th International Planning History Society Conference, 2012, 採用決定、査読有.

② 松原康介 「番匠谷堯二の青年期における国内業績」日本建築学会計画系論文集、2012年4月、674号、931-940頁、査読有

③ 松原康介 「ダマスカス、カスル・ハッジヤージュ通りの原状復旧型ファサード改善に関する研究」都市計画論文集、2011年11月、46-3号、691-696頁、査読有

④ Kosuke Matsubara, "Urban Conservation based on The International Cooperation -A case study of the Qanawat south area, Damascus-", Proceedings of International Symposium on City Planning in Korea 2011, pp. 427-436, 2011、査読有.

[学会発表] (計9件)

① Matsubara Kosuke "Mosquee a la Ville Nouvelle", The 1st Morocco- Japan Symposium -Sustainable Society through advanced sciences, Marrakech, Morocco, Mar. 15-16, 2012.

② 松原康介 「ベースマップシステムの機能と有効性 - J.C.David, "Politique et Urbanisme a Alep, Le projet de Bab al Faraj", 1986の解題を通じて-」、中東都市多層ベースマップシステムの地平、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、東京都、2011年11月17日.

③ 松原康介 「番匠谷堯二-中東・北アフリカ都市計画の開拓者-」目白が生んだ伝説の年プランナー 石川栄耀と番匠谷堯二 目白の森セミナー、切手の博物館、東京都、2011年10月2日.

④ 松原康介 「ベイルート・アレppo・ダマスカス：記憶のよすがの歩き方」、2011年度海外学術調査フォーラム地域別分科会 IV 南・西アジア・北アフリカ、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、東京都、2011年6月25日.

⑤ Matsubara Kosuke "Field Survey for Urban Conservation -In Search of Architectural Vocabulary of the Qanawat south area, Damascus-", Regional Development and Water Resource -A New Vision for Sustainable Society-, Tunis, Tunisia, Nov. 28-30, 2010.

⑥ Matsubara Kosuke "Urban Conservation based on the International Cooperation -A case study of the Qanawat south area, Damascus-", The 8th International Symposium on Architectural Interchanges in Asia, Kitakyushu, Japan, Nov. 9-12, 2010.

⑦ Matsubara Kosuke "Gyoji Banshoya in Alger -His achievement as a teamwork in l'Agence du Plan-", The 1st Algeria-Japan Academic Conference, Algiers, Algeria, Nov. 8-9, 2010.

⑧ Matsubara Kosuke "An aproach from urban planning history", Kosuke Matsubara, The 1st Meeting of the Project "Human Mobility and Multi-Ethnic Coexistence in Middle Eastern Urban Societies", JaCMES (Japan Center for Middle Eastern Studies), Beirut, Lebanon, Aug. 7-8, 2010.

⑨ 松原康介 「国際協力における歴史都市の保全再生の展開-シリア国ダマスカスの事例-」国際開発学会第11回春季大会、2010年6月5日、北海道大学、北海道.

[その他]

ホームページ等

<http://infoshako.sk.tsukuba.ac.jp/~matsub/>

(代表者ホームページ)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松原 康介 (MATSUBARA KOSUKE)
筑波大学・システム情報系・助教
研究者番号：00548084